

相手を意識させたプレゼンテーション

横浜市立南高等学校情報科教諭

山崎 旬一

1. 概要

高校1年生にプレゼンテーションの指導を行う際、情報安全の分野をテーマとさせ、その学習過程や発表を通して情報安全の指導の一部としている。さらに、附属中学校の生徒を対象に発表させることによって、相手を意識した取り組みをさせると共に、中学生に対する安全指導にも役立っている。

③ 3つの話題を含んだストーリーを作らせる

④ 10分のプレゼンテーションを作る

⑤ 学級内で発表会を行い、相互評価する

⑥ 優勝チームが中学生に発表する

⑦ 中学生からの評価をフィードバック

2. 本校の状況

2012年度に附属中学校を新設した。中学校は4クラス、高等学校は現在5クラス、2015年度には高等学校の1クラス募集が行われる。優しい気持ちの生徒が大多数で問題行動はほとんどなく、かなり落ち着いた学校になっている。

中学校の技術科の指導は高校の情報科職員が、情報分野の指導を35時間受け持っている。

3. 情報科の指導

科目は「社会と情報」を1年生2単位で指導している。ワープロ、表計算をそれぞれ5、7時間で指導した後、14時間を予定しプレゼンテーションに入る。アプリケーションの操作方法は30分程度しか指導しない。分からなければ実験したり、調べたりさせている。操作方法の質問には答えないと宣言しているので、生徒は仲間同士で操作方法を教え合っている。指導の中ではストーリーボードを書かせて発表の順序や内容の意識付けをさせ、作業報告書を毎回書かせることで、残り時間を意識させている。作成中の指導は机間巡視が中心となる。

4. 指導の流れ

指導は以下のような流れで行った。それぞれの段階での詳細を述べる。

① 抽選で5人1組のグループを作る

② 28個の話題から3つを選ばせる

① 5人のチーム：情報を共有し、協働作業をさせるために、チームにした。情報収集の分担、情報格納の規格化、デザインの統一、発表時間の管理、役割分担など個人の発表にはない発想や難しさがある。難しさを指摘して作業をさせると、反発せずむしろ生き生きと取り組んでいる。チームでの発表で難しいのは時間の管理だ。話し始めると時間を超過してしまい、最後の発表者は自分の持ち時間を削って時間超過のペナルティーから逃れなければならない。時間超過した生徒が仲間から責められるのではないかとこの題材を扱い始めた当初はかなり緊張した場面だが、班員が批判している場面はなかった。時間管理の指導にはリハーサルが必要で、少なくとも一度は時間を計って練習させる必要がある。リハーサルを通して、かなりの生徒が問題点を意識できる。

② 28個の話題：情報モラルのサブテキスト¹⁾を購入させている。目次に28個の話題が掲載されており、各話題に見開きで解説がある。1時間サブテキストを読ませ、グループごとにストーリー概要を考えさせる。ただし、グループ間での話題の重複は1つまでしか認めない。班ごとに扱う話題を発表させた際に重複が判明すると争奪戦を指示する。したがって、争奪戦に負けることも織り込んだ上で、5人で分担してテキストを読み、次善策を含めて検討することになる。この検討こそが情報安全の自習になっているととらえている。

③ 3つの話題：5人で3つの話題は、仕事の分担を難しくさせることによって話題のつながりを意識させたかったからである。1人1テーマでないために、まとめを考えたり、1つのテーマを2人で分担することでインパクトをねらったり、いろいろな工夫を行わざるを得なくなった。プレゼンテーションとして複数の担当者が発表を行う際に、それぞれの発表の関連性が上手にできていないと、短い話を次々に聞かせることになり、聞く人に集中力を要求する。話題の関連性を意識させることには、自分の話す内容が良く理解できていないと、次の話題につながらないと気付かせることにつながる。28個の話題の中から生徒が選んだトップ5は、「ブログの信頼性」、「チェーンメール」、「ワンクリック詐欺」、「肖像権・パブリシティー権」、「誹謗・中傷」だった。逆に全く選ばれなかった話題は、「ユニバーサルデザイン」、「引用」、「キーロガー」、「フィッシング詐欺」だった。「メールングリスト」、「Wi-Fi」、「オークション詐欺」も少なかったので、中学生に分かりやすく、自分たちもイメージしやすい話題の選択に偏っているように思われる。

④ 10分のプレゼンテーション：発表時間に使えるのはせいぜい2時間、個人の発表を評価することを考えると1人1分では短い、と考えて1人2分、班で10分の時間設定にした。班全体で1分以上の時間超過にはペナルティーを課す。発表時間2分の目安として、原稿用紙1枚で1分と考え、空白や段落を見込んだ上で、原稿用紙2枚と話している。

⑤ 相互評価：聴衆側の生徒には評価用紙を渡し、個人ごとに評価させている。コメントを書かせることはしていない。コメントを書かせることによってプレゼンテーションへの集中がとぎれてしまうことを避けたかったからだ。せっかくストーリーを工夫させたので、連続性をできるだけ担保したかった。

⑥ 中学生への発表：プレゼンテーションでは、誰を対象に話をするか、聴衆の分析をしなさいと指導する。相手の人数や年齢層、知識や関心などを知った上でプレゼンテーションを組み立てよと指示する。しかし、実際には同学年の生徒を対象にせざるを得ず、分析らしい分析や検討が行われなことが

多い。中学1年生を対象とさせることによって、使用する漢字、英単語、言い回し、専門的な言葉に注意しなければならない。集中力の持続性にも関心を払わなければならない。場合によっては冗談にも気を配る必要が出てくる。「誹謗中傷」「詐欺」「匿名」が読めるか、「萌え」「ガラケー」の意味が分かるか、携帯電話を持っていない生徒が多い中、携帯電話の料金の話をどうするか、パケットを話の中で使っているのかなど悩ましい場面が多数ある。机間巡視をしながら指摘をしていくと、生徒は「うん」と考え込むことになる。その後、生徒同士で「分かるかな」、「説明が必要じゃない」、「ふりがなは英語で書けない」などの指摘が起こる。まさに、相手を意識し始めることになる。検索エンジンに「キッズ goo」を使い始めた生徒もいた。相手が知っていて当然だという前提が崩れることで自分が話す内容の再構築も必要になってくる。分かったかのように用語を並べれば何とかなる状況から、内容を理解し、分かりやすく相手に説明する必要に迫られてくる。同年代ではなく、さらに自分が経験したことのない大人でもなく、通過してきた年代であるだけに、生徒は自分自身を振り返りながら相互に指摘し合っている。発表会の会場は本校のホールにした。1学年が十分入る広さがあり、使いやすい反面、最後列から見たスクリーンは教室より小さい。そのため生徒はスライドの作り方に工夫を求められる。「高橋メソッド」や「7行ルール」などを授業の中で指導するが、生徒のスライドはどうしても文字数が多くなる。中学生を対象としていることに気付かせ集中力の持続性、文字が読めないことへのストレス、スクリーンまでの距離、スライドは話の補助手段等の指摘を通し、極力文字数を少なくさせる。

当日の発表では様々な工夫が見られた。発表者の笑顔は当然のように見られた。全員が1列に並び挨拶するグループや、「皆さん、飽きていないですか」



図1 ホールの様子



図2 中学生からの評価の掲示

と呼びかけから始めたグループもあった。話の途中に寸劇を入れるグループがあった。飽きてしまうから、話の途中に刺激を入れようという発想だ。

⑦ 中学生からの評価：会場で評価シートを配り記入させた。話し方、内容、説得力、スライドの内容を評価させた。後日、中学生の授業中に高校生へのコメントの記述をさせた。中学生の素直な文章を高校生に伝え、高校生の意識を高めたかった。遠慮しないで書いて下さいと言ったために、辛辣な内容もあった。指摘されていることは正しいが、年上の生徒にそのまま伝えられず、生徒に断った上で私が入れたところもある。コメントは印字して情報科教室に掲示した。高校生は「これはありがたい」「言っていることはその通りだと思う」「すごい」「うちの中学生は違う」などと言いながら写真を撮っていた。反発をする生徒は誰ひとりいなかった。

中学生の書いたコメントをご紹介します。

「一組と二組の、発表が、ストーリー風で分かりやすかったです。特に、二組の「源さん」の物語が、簡潔にできていておもしろかったです。三組の発表では、最初は、声が小さかったけれど、一番最後に話をしてた人が、大きな声で分かりやすかったです。五組のスライドがみにくかったです」

「中学生が飽きないようにと、どのクラスも工夫していてよかった。クラスによっては、時々声が聞こえづらかったり、スライドの文字が見にくかったりしたクラスもあったけれど、劇などによって理解することができた。話し手が「こんにちは～！」と呼びかけてくれたり、「飽きてますか？最後なので頑張ってください」など中学生に呼びかけてくれたことも、「見よう！」「見たいな！」などステージ上に気を引きつけていた。また、盛り上げ方が「さすが、高校生！」と思えるところもたくさんあった。ここ

はこうしたほうがいいのではないかと思ったところは改善して、いいところはまねて、自分の発表にいかしたい」

「先輩の発表で一番印象的なのは、スライドのクオリティーがとても高かったことです。そのため、飽きることなく、聞くことができました。ですが、声の大きさ、感情のこもりかたなどは、個人差が激しく、とてもはきはきと、ゆっくり話している先輩と、もごもご、早く話している先輩との差が激しかったです。せつかく、とても楽しめる発表だったのに、その点で評価が変わりました。また、身振り、手振りをちゃんとやっている先輩とやっていない先輩の差があるのも、少し残念に感じる点だった。ですが、今回、先輩のプレゼンを聞いて、自分の改める点もよく見えるようになったし、先輩の悪いところ、いいところをみて、自分自身も改善していけると思いました。ありがとうございました」

——(以上中学生の文章をそのまま記しました)——

中学生の評価が高かった班の発表は、確かに引きつけられる部分がある。教師の評価が高かった発表は、源さんという架空の人物が携帯電話で高額のパケット代金を請求されたり、著作権法の問題を指摘されたり、ウイルスに感染するストーリーだ。舞台上「源さん」と書いた名札を首から下げた生徒が寸劇をする前でスライドを使った発表が進んでいく。スライドも文字量が少なく、印象的に作られている。

別の班の発表は声の出し方や表情、最初の出だしが印象的だった。「飽きていますか」と笑顔で話されるのは意外だったようで、会場が明るくなった。発表者の声も大きく明瞭で、分かりやすい話し方が好評だった。



図3 発表で使ったスライドの例

5. 情報安全の指導

情報安全の指導は、生徒の発想を生かしながら考えさせ、議論しながら結論を導いていくことが望ましい。しかし、限られた時間の中でかなりの量を扱

うことになり、テキストを使った座学の講義になってしまいがちだ。時間をかければ調べ学習やワークシートなどの工夫が考えられるが、ままならない。授業をしている方も聞いている方も、話題によっては当たり前のことを当たり前話し、話されることになり、何かおもしろさに欠けるが多かった。

生徒は高校生も中学生も不思議と仲間の話を良く聞いている。生徒の発表で居眠りをするのではなく、集中力が保たれている。

そこで、いっそのこと生徒に情報安全の授業を行わせてみようということが発想の原点だ。今までは、プレゼンテーションの題材として修学旅行を扱い、学年と協働しながら事前指導の一部として位置づけてきた。生徒にとっては身近な内容を調べることになり、モチベーションも高く、扱いやすい題材だったと評価している。時代の変遷と共にプレゼンテーションそのものの認知度は上がっている。5年前にはスライド作成に抵抗感があった同僚職員が、今では学校説明会のスライドを難なく作る。修学旅行の事前指導にも学年の職員がITを利用し始めている。メールを使った調べ学習や情報収集、添付画像の利用などが行われている中、情報科の授業として題材を変えても良いと判断した。

情報安全の指導内容のうち生徒のプレゼンテーションに含まれなかった内容や生徒の話が弱かった部分は教師が後日講義した。

情報安全のサブテキストは1人1冊購入させている。まとめて40冊購入し全員で使い回すことも検討したが、家庭での利用、汚れへの対応などを考え個人購入にした。

情報安全の指導を行う際、必要な画像の入手が思ったより難しいことに気付く。テキストに付属の画像は自由に利用できるのが便利だ。画像が入手できないときには友達をモデルとして撮影していた。



図4 スマートフォンに届いた誹謗中傷のメールを見て驚いている様子

図4はスマートフォンに届いた誹謗中傷のメールを見て驚いているところだそうだ。

6. 今後の展開

高校生のすべてのグループが中学生の前で発表できることが理想だが、会場や時間の制限があり実現は難しい。せめて高校生代表者の発表を同じ高校生にも聞かせたいと思っている。そうすると人数の問題からアリーナを使うことになり、いすの準備やスクリーン設置に手間がかかる。VTRで記録することも考えたが、会場の雰囲気は伝わりにくい。せめて今年は中学生の感想文を高校生のホームルーム教室に掲示する予定だ。発表した高校生には中学生に向けてメッセージを書かせる。相互に意見交換ができれば良いが年齢差が大きすぎるため、文章でのメッセージのやりとりを考えている。

自由に話題を組み合わせた方が発想も柔軟でもしろいと考えたが、身近な話題になりがちで、選択が限定されてしまった。今後は、話題の組み合わせを事前に作っておき、それを選択させることの検討をしていくつもりだ。

発表内容そのものの指導は、プレゼンテーションの指導と同時に行うことになり、かなり忙しい。リハーサルや机間巡視を通してチェックするが、完全にはできない。中学生への発表なので内容をチェックしたが、それでも当日あらためて聞く誤解を招く表現もあった。

7. 中学校技術科について

最後に、中学校技術科におけるこの時間の位置づけを説明する。技術・家庭科は3年間を通して5単位で技術分野は材料と加工、エネルギー変換、生物育成、情報で構成されており、情報分野は情報通信ネットワークと情報モラル、デジタル作品の設計・製作、プログラムによる計測・制御に分かれている。高校生の発表を聞く時間は、情報モラルとデジタル作品の製作に位置づけている。中学生たちは事前にプレゼンテーションの授業を受け、作成を経験している。また、教科以外でも学習成果の発表を積極的に行っている。そのような背景があり、プレゼンテーションを見る目も鋭い。

参考文献

- 1)『ケーススタディ情報モラル』第一学習社、2013年